

昨年 12 月、アフガニスタンで実権を握るイスラム主義勢力タリバンが、大学に対し、女子教育を無期限で停止するように通達を出したというニュースを目にした。アフガニスタンでは、タリバンの復権後、日本の中学・高校に相当する女子の中等教育が再開されておらず、この通達で女性の教育を受ける権利がさらに制限されることになった。

私はこのニュースを見て憤りを感じると同時に、津田梅子先生が今の世にご存命だったら、この出来事をどのように受け取るのだろうかと思った。私は以前、『アメリカで学んだ少女―津田梅子ものがたり』という本を読み、津田先生が日本の女子教育と社会的地位の向上に尽力された方だと知り、今日、私たち女性が自由に学び、職業を選べる世の中があることを当然のように思っていたはいけないのだと強く感じたことがある。

津田先生は 1908 年に卒業生に贈ったスピーチで、「真実と正義のために、あなたがさらに強くなったということを示してください」と述べている。この言葉を受けて私は、現在、かつての日本以上に、女性の就労や教育などの権利が侵害されている国があるという真実を、どこか遠くの国の問題としてとらえてはならないと、正義をもって強く訴えたいと思った。

アフガニスタンで女性は家族以外の男性に肌を見せることができないので、医療機関では女性の医療従事者にしか診察をしてもらえず、小学校では女性教員にしか教えられる。医学部や教育学部を含む、すべての分野で女性が高等教育を受ける機会が閉ざされた今、女性の医療従事者、女性の教育者が、今後は育成されないことになる。女性が医療につながらずに命を落としたら、その子供の命や健康、生活にも大きな影響をもたらすこともあるだろう。学ぶことと生きることは直結しているのだ。教育が十分に行き届かない地域の状況を知ると、学びの循環がいかに重要であるかがわかる。津田先生のスピーチには、「実生活においてこそ、あなたの教育が試されることになる」とも述べられている。その言葉を通して私は、個人の学んだ成果を生活の中で自分以外の人々や団体のために活用してこそ、共生社会は実現するのだということを感じ取った。

昨年 10 月、私たちの国、日本では、文部科学省の発表を受けて「不登校、いじめともに過去最多」とメディアで報じられた。不登校は身体的な理由など様々な要因があるだろうが、いじめは人が故意に行うもので、誰かの学ぶ権利を著しく侵害する行為だ。学ぶということが、いかに尊いことなのかを知っていたら、いじめをしようなどと思わないはずだ。アフガニスタンのように教育を受けたくても貧困や性差別によって十分に受けられない人々がいる国があることを、日本の学生皆が知るべきだ。私たちは、津田先生のようないしえの先人たちのおかげで豊かな学びの機会を享受できることに感謝し、お互いの学びの権利を尊重しながら将来の学びの循環へとつなげていかなければならない。